

んとてうちての給へば、御心をやぶらじとて、えおはしまさず、

〔倭訓栞前編二十三〕の、しる 文選に嗶呻、又駢匈をよめり、真名伊勢物語に匈匈と填り、廣韵に

大聲也と見ゆ、今の俗高聲といふ意也、罵、知の義にや、新撰字鏡に聒もよめり、或は嘔字をよめども、字書に見えず、篇海に嘔は熊虎聲也と見えたれば、是なるべし、或は詬をよめり、

〔常陸風土記筑波郡〕古老曰、昔祖神尊巡行諸神之處、到駿河國福慈岳、卒遇日暮、請欲寓宿、此時福慈

神答曰、新粟初嘗、家内諱忌、今日之間、冀許不堪、於是祖神尊恨泣、嘗告曰、即汝親何不欲宿、汝所居山生涯之極、冬夏雪霜冷寒重襲、人民不登、飲食勿奠者、

〔古事記神武〕爾大伴連等之祖道臣命、久米直等之祖大久米命二人、召兄宇迦斯、罵嘗云、伊賀此二字

所作仕奉於大殿内者、意禮此二字先入明白其將爲仕奉之狀、而即握橫刀之手上、矛由氣此二字、矢

刺而追入之時、乃己所作押見打而死、

〔古事記傳十九〕罵嘗は能理此二字兵と訓べし、万葉十二八丁に、柎セ越爾シ麥キ昨ク駒コ乃ノ雖嘗シまた於能禮レ故コ、

所嘗而居者十六丁に、將若異子等ヲ丹ニ所嘗金目ハ八ナなどあり、能流とは、もと詔宣などを云を、又如

此人を辱しめて言ことにも用ふなり、

〔日本書紀十九〕二十三年七月、同時所虜調吉士伊企儼、爲人勇烈、終不降服、新羅鬪將、拔刀欲斬、逼而

脫、揮追令以尻醫、向日本、大號叫也、曰、日本將齧我臆、雖被苦逼、尙如

前叫、由是見殺、其子舅子亦抱其父而死、伊企儼辭旨難奪、皆如此、由此特爲諸將帥所痛惜、

〔續日本紀三十九〕延曆七年六月丙戌、中納言從三位兼兵部卿皇后宮左京大夫大和守石川朝臣名

足薨略、性頗偏急、好詰人之過、官人申政、或不合旨、即對其人極口而罵、因此諸司候宮曹者、值名足

聽事、多踟躕而避、

〔源平盛衰記五〕成親已下被召捕事、